



直接コンタクトを取ること に成功!

緊

特別取材班を飛ばすことを計画はしたのだが、経費その他の問題であえなく断念。せまる締め切り地獄の中で必死の思いで打ったメールに、なんとご本人から親切なレスが戻ってきた。そこに描かれていた驚愕の(大げさかな?)事実をもとに、編集部の方角においてご紹介しよう。

急

ご本人の名は、加藤朋海氏。3歳からオルガンに興味を持ち、のちにピアノに親しむようになる。が、そうやって始まった楽器生活はしばし休憩。高校入学後に、管弦楽団部でトランペットと出会ってからの再突入は実に急角度だった。ご本人によれば、下記のようになる。

企

「いくら子供の頃ピアノを弾いていたとはいってもオーケストラの譜面は『Trompette in F (オーケストラにおけるトランペットの譜面は、B♭管だけとは限らないのだ)』などがなかなか読めず、読めてもオケのテンポについていけず、そこではじめてのが聞き取り暗記演奏でした」

画

謎のBSCを追い!

!

当然、時代はまだCD以前。MDもiPodもない時代、カセットテープは文字通り氏にとつての「宝宝箱」(「カセット」とは、本来貴族の宝宝箱を意味するフランス語)。カセットを朝から晩まで聞きながら、譜面とスコアを見くらべてみる。どこにどんな音が入っているのだろうか。

「いわゆる『耳コピー』を必死にやりました。兄貴の知り合いから録音してもらったカセットには偶然にもウィーンフィルやベルリンフィルが多く、無知で譜面の読めなかった自分はクソまじめに録音を忠実に再現するよう努力していました」

吹奏楽とは一歩隔てた地点から、トランペットを始めた加藤氏。オーケス

トラのトランペットパートを耳で聞き取り、喇叭でマネをしていく。いうまでもなく耳を鍛えるには最適な練習といえよう。氏はそんな練習を重ねていたさなかの高校二年の頃に、トランペットを作りたい、と漠然と考え始めた。「父の希望で『大学に行ってまともな仕事を』という道をたどって来たものの、本心では普通のサラリーマンにはなりたくないというのと、自分の手ですべてができるような仕事がやりたいという気持ちが強かったんです」

青年はドイツを目指す

ヒトにはさまざまな夢を持つ権利がある。喇叭吹きになりたい、という夢も、喇叭作りになりたい、という夢も、どちらも実現には困難の伴う夢であることは間違いない。しかし、困難を数えていくと結論は「夢の放棄」に至るのが関の山。考える前に飛べ、というのは、夢を見る人に不可欠の至言かもしれない。氏は、四の五の考える前に行動に移した。扉を叩けば開かれる。喇叭作りの夢を抱いた高校生は、わが国が世界に誇る巨大楽器メーカーのひとつに手紙を書いたのだ。そして、担当者へ会いに行った。扉を叩いたら、とりあえず扉の向こうから返事だけは聞こえてきたわけだ。

しかし、その「返事」は優しくもつれないものだった。大学を出てから就職試験を経て合格し、見事入社してのちにトランペット製作部を希望せよ。それが答えだった。見事入社し、希望したからと言って、必ずそのセクションに入れる保証は何もない、ということも高校生にも分かる現実だった。「そこを辞めた直後、自分の夢が崩れたように感じました。足は自然に港を目指していました。東京湾沿いのベンチに腰をおろし、何時間か海の風を浴びて将来を考えているうちに、少しずつドイツに行く決心が固まり始めました」

ドイツはいうまでもなく、金管楽器(だけではないのだが)の故郷といってもいい。世界に名だたるメーカーの多くがそこにあり、世界の名匠と呼ばれる人々も若き日にはそこで修行を重ねていた、ということはすでに知っていた。日本で駄目なら、本場があるさ。そう考えると、次第に目標への最初の里程標が見えてきた。まずは本場で技術を、教わろう。

なにとはもあれドイツに行くのなら、ドイツ語が必要だ。言葉を知らなければ、教わることはおろか、その教わる

しばらく前の話になるが、インターネットを騒がせていた一枚の写真がある。あのウィントン・マルサリスがひとりの東洋人男性と一緒に写っている写真である。調べてみると、この眼鏡の男性は、ドイツで喇叭を作っているのだという。その名もブラスサウンドクリエイション(Brass Sound Creation)。その正体を探るべく、本誌はドイツへ特別取材班を飛ばすことを計画したが…

取材協力:
ブラスサウンドクリエイション <http://www.brasssoundcreation.org>
有限会社セレクトインターナショナル <http://www.select-inter.com/>



写真上・TR 501G
下・TR 106S「ミレニアム」

場所にたどり着くこともできない。ということで、加藤氏はドイツゲート協会ドイツ語のレッスンを始める。楽器作りへの夢は、語学習得から始まった。遠回りのようであるが、実に実践的な道だった。

ベルリンフィル首席にも 会って相談した

ドイツゲート協会は、氏に見事な成果をもたらした。独語会話の実力はもちろん、なんとベルリンフィルの首席(当時)コンラディン・グロート氏とも会えたのだ。ゲート協会会館ロビーのパンフレットの中に、たまたまドイツ芸術輸入会社の「ベルリンフィル100周年」のカタログがあった。そこには、社長さん自身がグロート氏自身との深いつながりを語っていた。おりしも、ちょうど日本公演でサントリーホールにきていたベルリンフィルを直撃し、グロート氏から当時日本で唯一ドイツのマイスターの称号を手にして人物に会うようにアドバイスを受ける。その人から紹介されたマイスター、ハンス・シュナイダー氏のもとへ、早速仕込んだドイツ語で手紙をした

ためた。叩いた扉はついに開いた。なんとシュナイダー氏はちょうど新しい見習いを求めていたところだったのだ。

かくして、氏はドイツ行きの切符を手に入れる。もちろん実際に手にするまでは、それまでドイツ行きを内緒にしていたご両親に経過を報告する、という「大仕事」も残っていた。が、ビザ申請の日の朝に電話で事情を話し、ドイツ大使館に来てもらうように親を説得して見事に成功。作戦勝ち、といえよう。氏は無事ドイツへ旅立つことが出来たのである。

すでに工業化の進んだドイツの楽器製作界において、ネジの一つまで自家製という中世以来の伝統的屋内制手作業を続ける工房が、氏を待っていた。金管楽器製作の基礎を学ぶには、理想的な場所だった。氏は当時のことをこう語る。「これ以上は、という理想的な環境で修行しました。楽器を製造すること以上に、ヨーロッパでしか手にできないような古い楽器の修理、調整では部品の複製など多くのことを学びました。歴史的な名器を手にしてその素材やつくりを修理を通して感じるこ

も、今日楽器開発へのよい経験となっています」

いずれも、日本には到底体験できなかったことである。あの日、東京湾でひとり見出した結論は、正しかったのだ。

KATOHORNから BSCへ

見事にマイスター試験に合格したのは1990年。自らの理想を理論的に裏づけ、具体的に現実化した楽器KATOHORNで最後の試験を突破し、その後、ゲゼレ(職人)としてドイツ、スイスの工房を渡りあるいてこれまでの修行で出来ていなかった工程、すなわちピストンバルブの製作、工業的楽器製作など学び、3年後にはドイツ最古の町トリアーのクリューガー(Franz Josef Kroeger)の工房長に就任する。工房の実務と経営の補佐と平行し、いよいよ念願だった最初のトランペットの開発に着手し、同年KATOデザイントランペット(Kroeger Trumpets / designed by Tomomi Kato)が誕生した。

最初の顧客は一般の市場ではな

く、業界内だった。その技術力と理念に、数多くの伝統的な工房や企業が着目し、氏に名指して業務提携の依頼が相次ぐようになる。それを契機に1995年にフリーのデザイナーとして独立し、本拠地をドイツとフランスの境目のルクセンブルグ王国に設置。ヨーロッパのみならず、アメリカ、アジアなど世界的に活動を始める。翌年、ついにデザイナーの仕事と平行して、独自の企画“BRASS SOUND CREATION”が産声を上げ、BSCトランペットの開発がスタートしたのである。

ロータリー式が 伝統のドイツで修行した 名匠がこだわる、 非ドイツ的 ピストン式楽器

BRASS SOUND CREATIONが目指すのは、呼んで字のごとく「金管楽器の音色を作ること」である。ここで紹介した写真をご覧いただいでお分かりのように、同社の楽器はドイツ



ケースは二段構造で、内部に小物などが入れられるようになっている



第三枚差管やベルの「背骨」にも注目

の伝統的工房での修行を基にしながら、いわゆる「横喇叭」(横にして構える喇叭、つまり一般的なロータリー式トランペットのことです)ではなく「たて喇叭」(つまり、縦方向に動くピストンをもつトランペット)である。そのアイデアは、音楽的発想のルーツを、中央ヨーロッパでクラシック音楽の源流が生まれる19世紀までさかのぼって考察したことに由来する。1814年のヴァルヴの発明とは関係なく、現代においても重要とされる作曲家のほとんどはナチュラルトランペットかロータリートランペットの音色をイメージして作曲されていた、という事実が氏の理論の背景にある。ピストン式の音色は、イメージの外にあったのだ。「ピストンヴァルヴの故郷フランスでも(ナチュラル)トランペットとホルネットは別の楽器として扱われていた。また、シカゴ響の名手アドルフ・ハーゼ氏は「ベルリンフィルが初めて渡米したとき我々は金管セクションの音色

に圧倒された。その音が我々の目標となった」と語っています。トランペット製作者ヴィンセント・バック氏も同時のヨーロッパとアメリカの音楽観を分けて話しています」

ピストンか、ロータリーか。傍目から見たら、単なる「たて」か「横」か、物理的な方向性の違いにしか思えない「差異」は、実はヨーロッパの音楽文化とアメリカの音楽文化を象徴する違いだったのだ、といってもいい。「ちなみに伝統的にドイツ語圏ではピストントランペットはジャストトランペットと呼ばれクラシックに対応するような楽器の開発は行われていませんでした」

と氏は語る。新しき「金管楽器の音色の創造(BrassSoundCreation)」はクラシック音楽の生まれ育った環境の中で、その伝統的な音楽性に基づいてピストントランペットを開発していくといった、歴史的にこれまでない視点から始まったのである。

音の輪郭か、中心か

グローバルスタンダード、という陳腐な表現が一世を風靡し、またたく間にその実際のところが、単なるアメリカニズムへの無批判な傾倒に過ぎなかった、ということが暴露された昨今である。アメリカという国のスタンダードは必ずしも「絶対」ではなく、ヨーロッパは厳然としてそれとは別の判断基準を持っている、ということを示した事例は、最近の国際紛争の例を引くまでもない。ヨーロッパとアメリカの金管楽器の考え方の違いを、氏はこう語る。

「両者の根本的な性質の違いは演奏の際、音の中心を使うか外側の輪郭を使うかといったところにあります。ヨーロッパ本土では「人の歌声」のように音の中心でメロディーを奏でるのに対し、イギリスやアメリカでは音の輪郭を重要視します」

氏によれば、BSCの楽器は「音の中心からコンサートホール全体に広がる性質を大事にしているので、雑音が少なく純真な音色が」出せる、とのこと。音の中心が「散らない」ということが大切なのだ、と氏は語る。

「音の中心が散らない楽器は、アンサンブルの場合、お互いの音色が手を差し伸べるように和音が作りやすい、という利点があるのです。和音の

上に、自分達では吹いていない倍音がパイプオルガンのように共鳴して、これまで鳴らなかった空間(次元)が鳴るようになるのです」

その結果、バンド全体の音色が豊かになる、という。氏からのメールは、下記のように結ばれていた。「BSCの音はクレッシェンドの際、ホースから出る水のような強さではなく、電灯の明かりの強さのように広がる感じなので他の楽器の音色とぶつかり合うことなく、弦や木管楽器とも融けやすく、普通問題の多いピアノや低音でも他の楽器にマスキングされることなく、リラックスした演奏ができます。音色の良い楽器は吹きにくい、といった常識がありますが、BSCは音色の設定と同時に音響物理学的に支障をおこす箇所を改善してあるので、正しい呼吸法で吹くようになると非常に吹きやすく舞台の上でも使いやすいように工夫されています。人の歌声のように温かく響き柔軟性のあるBSCトランペットは、クラシック奏者のみならずジャズ奏者にも認められています」

その証拠が、冒頭に掲げた写真なのだ。マルサリス氏の他にも彼の同僚のマーカス・プリンタップ氏(別項で紹介している来日公演でも吹いていたらしい。取材し損ないました!)クラシックでは、ミュンヘンフィル首席クリンガー氏やインズブルック音大のリンガー教授等も愛用者だと言う。また、ハイスピードバルブスプリングなどの「小物」では、すでに国内でも「定番」として扱われているというブランドに成長しているというではないか(不勉強でした!)

クラシックとジャズ。アメリカとヨーロッパ。西洋と東洋。日本と外国。職人芸とハイテクノロジー。「対立概念」と呼ばれているものはさまざまある。が、どうやら、そういった安直な「対立」の向こうに、確かに未来は開いているのだ。そして優れたセンスの持ち主ならばジャンルを問わず、みなそれを見抜いているのだ。

メールをうけた直後、本稿をまとめる最中にその現物と触れ合う機会があった。それはきわめて短時間ではあったが、いい楽器に触れた幸福感に溢れた時間だった。完全な手作りだから日本に入ってくる数はたぶんそう多くはないだろう。

が、無理な願いを承知で言うなら、願わくば、あなたの街の楽器屋でもそのような「幸福感」が味わえますように。